# マラムレシュには数百年前のヨーロッパが息づいていた

みやこうせい
フォトアーチスト、著述家

ルーマニア北北西部のマラムレシュは、地理学でいうウラル以西のヨーロッパの中心に属すフォークロアの一大残存地域。人々は和を尊しとして、よく働き、人生を楽しむ　©みやこうせい（左も）

## ルーマニアの隠れ里の魅力に心身をとらわれて……

ローマ帝国の属州ダキアが国の栄えある先祖ということで、当地ではルーマニアを誇らしげに「ロマニア」と呼ぶ。まわりをほぼスラブ族の国に囲まれて、中欧では唯一ラテン系の民が多く住みなしている。

1965年の初夏、まったく偶然、この国に紛れ込んで、爾来、ロマニアック（?）と化した。言葉は右も左も数え方も知らなかったが、人々は親切を極め、温かく（気質は今も変わらない）、滞在中、毎瞬が希望と期待に脹らみ、いとも艶っぽく甘やかな空気が身になじみ、しみ透った。折しも、チャウシェスクが指導者として登場した年で、国の雰囲気はとても明るく感じられた。

全体の様子がよそ者にどうかと思われ出したのは70年代にも入ってからで、厄介な制限がつきまとい始めた。希望を担うと思われた指導者は誇大妄想の独裁者と変じ、秘密警察がその手足となり、民を恐怖心に陥れるのが日常となった。

ぼくは、未知の国に入って数カ月後に、偶然、神が引き合わせたように、人々の強い勧めでヨーロッパ最大のフォークロアの残存地域、北北西部マラムレシュに入って、その魅力に心身をとらわれることとなった。ここはルーマニアの隠れ里で、数百年前のヨーロッパの村の風習、たましいが脈々と息づいていたのだ。

カルパチア山系に住む民は、よく働き情が深く、信仰心に富み、原ルーマニア人と称して憚（はばか）らない。旅人を心を込めてもてなし、家に入るや家族扱いし、「私の孫」「息子」と言い、数日滞在して別れるときは、じんわり涙ぐむのである。こう書きつつ、懐かしく、もう会えない面々を想起して、胸がしとど熱くなってくる。

みやこうせい●バルカンの民俗に惹かれ、1965年以来、カルパチア山系の村に通う。著書『マラムレシュ――ルーマニアの村のフォークロア』『ルーマニア――人・酒・歌』『ユーラシア無限軌道』ほか多数。翻訳『金の鶏』『ボリボン』など。パリ、ウィーン、ローマなどで民俗写真展開催。ルーマニア学術会議名誉会員

ドナウの最大支流のティサ川上流に住む、農牧をたつきとし、信仰心の厚い民は、衣食住とも自給自足でまかなってきた

## 村の長老は生粋の農牧民、生来の詩人、野の哲学者、思想家だった

はじめての訪問で、どの家でもたっての勧めで滞在を延ばし、3カ月間、言葉はわからなくも、拙いフランス語で方々をめぐり、多くの友人ができた。地理学の宝庫と言われる豊かな風土、原初の風俗、人々の魂に心底とらわれ、毎年、この国に通うことになる。

大まかに〝社会主義〟の枠のなかで暮らす山村の民。通った村は、土地が国有化されていなく、むしろ、自由な気分が漲(みなぎ)っていた。人々は古い風習、習慣を守り、宗教行事をこなし、衣食住を自前でほとんど賄っていた。人々の生き方に、人間の原点を見出し、意味を認め、ぼくは繰り返しまき返し、マラムレシュへ足を運んだ。その数、120回以上。その立場はカラヤンと同じ。人生を〝棒に振った〟！

村の暮らし、人々の精神のあり方、儀式と人や生活のかかわりなど、すべてのモメントを知りたくなった。周囲の村にも臆せず入り込んで行く。

村には、農業と牧畜のエキスパートである人々と、知恵袋とも言うべき長老が何人かいて、彼らは、生粋の農牧民でありつつ、生来の詩人（結婚式のときなど、延々と即興で詩を詠み、歌うのである）、野の哲学者、思想家で、思いが深い。高く清らな精神を抱き、殊にも丁寧な生活を送るこの人たちからの恩恵は、言葉に尽くし難い。

農業と牧羊にたつきを求め、人々の多くが〝羊の羊による羊のための〟暮らしを送り、人のことを自分のように切実に思い、五感をフルに発揮して、つまり等身大に生きて、思わず「にんげーん！」と叫びたくなる、そんな人たちで、折に触れ歌と踊りと地酒に酔う。彼らはまさに極めつきの祝祭びとである。

## フォークロアには体制維持の巧みな阿片の効果もあった

必然、ルーマニアのフォークロアの本を書くようになる。副産物として写真も撮る。行くほどに疑問が生じる。切りがない。人々のあり方にのめり込んで、音楽の本まで書くことになった。バルトーク同様、村に深く触発される。

秘密警察のたびたびの妨害、干渉があったものの、しまいに彼らは猜疑心を解いたようだ。無鑑札で村に入り込めるようになった。しかし、監視は体制崩壊の89年末まで続き、その2年後まで継続したと思い知ったのは、数年後のことだった。しかし、ぼくはルーマニアとかくも長くかかわって、一度たりとコミュニストなる人士に会ったことがない。

ブリューゲルの絵そのままの村の結婚式、死者の結婚式という再生の意味を備える未婚者の葬いに心打たれ、日曜の踊りの会に数知れず飛び入りし、村人の感覚を存分に味わってきたが、フォークロアには体制維持の巧みな阿片の効果もあった。folkloreはfakelore（?）になりかねず、独裁者は少数民族ハンガリー人の美の極みの風俗を憎悪した。

ある年、魔女にぜひ会いたいという岸田今日子さんをルーマニアに案内したが、祝祭日なのに村に活気がなく、歌と踊りにほとんど接することができなかった。若者が多くEU諸国に稼ぎに出て、頭脳も流出し、国全体にうそ寒い空気が淀んでいる。生活があるのに伝統どころではないと言うのだ。

ぼくはこれまで、ことあるごとにルーマニア幻想を振りまいてきたが、体制崩壊後、格差は深化し、拝金思想がはびこり出した。失業する自由まで得て、人々が捨て去り失ったものの意味の大きさに気づくことはあるだろうか。複雑な思いである。